

花き類登録農薬一覧①

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病虫害	農薬名	RACコード	成分系	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注 意 事 項
は種又は 植付前	苗立枯病 (リソクトニア菌)	カスタート [®] 微粒剤(劇)	8F	(タソ [®] メット剤)	土壌混和	30kg/10a	1回	株腐病、球根腐敗病、首腐病、半身萎凋病、萎凋病、萎黄病、白絹病、立枯病、根頭がんしゅ病、ネコフセンチュウ、青枯病、一年生雑草にも適用あり。
—	立枯病・苗立枯病 茎腐病	オーソサイト [®] 水和剤80	M4	(キャフ [®] タン剤)	散布	600倍	8回以内	保護殺菌剤
定植前	立枯病 (リソクトニア菌)	リゾレックス粉剤	14	有機リン系 (トルクロホスメチル)	土壌混和	50kg/10a	1回	浸透性殺菌剤 トルクロホスメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 リゾレックス水和剤は株腐病、茎腐病、白絹病(株元灌注)にも適用あり。
生育期		リゾレックス水和剤	14		土壌灌注	500倍	5回以内	
定植時又は 生育期		ユニフォーム粒剤	11	ストロビ [®] リン系 (アゾ [®] キシストロビン)	土壌表面 散布	18kg/10a	3回以内	アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 メラキシル及びビメタキシルMを含む農薬の総使用回数は4回以内(但し、生育期は3回以内)とする。
			4	アミト [®] 系 (メタラキシルM)				
—	菌核病	トップシンM水和剤	1	ベンゾイミダゾール系 (チオファネートメチル)	散布	1,500倍	5回以内	浸透性殺菌剤 チオファネートメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 特に連用を避ける。
—	白絹病	モンカットフロアブル40	7	アミト [®] 系 (フルトラニル)	株元散布	1,000倍	3回以内	浸透性殺菌剤 フルトラニルを含む農薬の総使用回数は3回以内とする。
—	うどんこ病	ダコニール1000	M5	有機塩素系 (TPN)	散布	1,000倍	6回以内	保護殺菌剤。 チュリップは褐色斑点病、ゆりは葉枯病・斑点病、りんどうは褐斑病・葉枯病で適用あり。
発病初期		アンビルフロアブル	3	ステロール生合成阻害剤 (ヘキサコナゾール)	散布	1,000倍	2回以内	浸透性殺菌剤 ステロール生合成阻害剤は耐性リスクが高いため、他剤と併せて総使用回数は2回以内とする。
発病初期		カリグリーン	NC	炭酸水素塩剤 (炭酸水素カリウム)	散布	800倍	—	浸透性殺菌剤
発生初期		サンヨール	M1	有機銅系 (DBEDC)	散布	500倍	8回以内	保護殺菌剤 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。 ペチュニア、ハンジー、スターチス、プリムラは開花前まで適用。
発病初期		ホリオキシAL水溶剤	19	抗生物質 (ポリオキシ複合体)	散布	2,500倍	8回以内	浸透性殺菌剤 予防効果に優れる。 黒斑病、灰色かび病、ハダニ類、アザミウマ類にも適用あり。
—		パンチョTF顆粒水和剤	U6	アミト [®] 系 (シフルフェナミト [®])	散布	2,000倍	2回以内	ステロール生合成阻害剤は耐性リスクが高いため、他剤と併せて総使用回数は2回以内とする。
			3	ステロール生合成阻害剤 (トリフルミゾール)				
発病前～ 発病初期		ショウチノスケフロアブル	U13	(フルチアニル)	散布	2,000倍	2回以内	新規有効成分フルチアニルとメ [®] ニ [®] リムとの混合剤。 メ [®] ニ [®] リムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
			9	アニリノピ [®] リニジン系 (メ [®] ハ [®] ニ [®] ヒ [®] リム)				
発病初期	灰色かび病	アフエットフロアブル	7	アミト [®] 系 (ヘンチオピ [®] ラト [®])	散布	2,000倍	2回以内	浸透性殺菌剤、耐性菌防止のため使用回数は2回まで。
発病初期		フルビ [®] カフロアブル	9	アニリノピ [®] リミジン系 (メ [®] ハ [®] ニ [®] ヒ [®] リム)	散布	2,000倍	5回以内	保護殺菌剤 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。 メ [®] ニ [®] リムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
—		ゲッター水和剤	1	ヘンソ [®] イミタゾール系 (チオファネートメチル)	散布	1,000倍	5回以内	浸透性殺菌剤 予防効果に優れる。 チオファネートメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 特に連用を避ける。
			10	ヘンソ [®] イミタゾール系 (シ [®] エ [®] オフ [®] エンカルブ [®])				
発病前～ 発病初期		ホトキラー水和剤	BM2	生物農薬	ダクト内投入	15g/10a (1日あたり)	—	発病前に使用する。
定植時	カフ [®] ラヤカ [®]	カルホス微粒剤F(劇)	1B	有機リン系 (イソキサチオン)	作業処理 土壌混和	6kg/10a	1回	イソキサチオンを含む農薬の総使用回数は1回以内とする。
発生初期	アブラムシ類	マラソン乳剤	1B	有機リン系 (マラソン)	散布	2,000倍	6回以内	ハダニ類にも適用あり。
発生初期		コルト顆粒水和剤	9B	(ヒ [®] リフルキナゾン)	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
発生初期		スタークル顆粒水溶剤	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (シ [®] ノテフラン)	散布	2,000倍	5回以内	コナジラミ類にも適用あり。ハモグリハエ類には1,000倍(灌注1L/m ²)で適用あり。
—		スカウトフロアブル(劇)	3A	ピ [®] レスロイト [®] 系 (トラロメトリン)	散布	2,000倍	2回以内	ピレスロイト系殺虫剤は、抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
発生初期		オルトラン水和剤	1B	有機リン系 (アセフェート)	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、ヨウムシ類、アオムシにも適用あり。アセフェートを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
—		ロディー乳剤(劇)	3A	ピ [®] レスロイト [®] 系 (フェン [®] プロバトリン)	散布	1,000倍	2回以内	ハダニ類にも適用あり。ピレスロイト系殺虫剤は、抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
発生初期		オルトラン粒剤	1B	有機リン系 (アセフェート)	株元散布	6kg/10a	5回以内	た [®] であいを除くアザミウマ類、ヨウムシ類にも適用あり。アセフェートを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
生育期		アドマイヤー1粒剤	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (イミタ [®] クロフリト [®])	株元散布	2g/株 6kg/10a以内	5回以内	イミタ [®] クロフリドを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 菊類のみ施設限定。
発生初期		モスピランシ [®] エット(劇)	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (アセタミフ [®] リト [®])	くん煙	50g/400m ³	5回以内	アセタフリドを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 温室、ビニールハウス等の密閉できる場所で使用できる。
発生初期	アサミウマ類	カウンター乳剤	15	昆虫成長制御剤 (ノハールロン)	散布	2,000倍	5回以内	
発生初期		モスピラン顆粒水溶剤(劇)	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (アセタミフ [®] リト [®])	散布	2,000倍	5回以内	アブラムシにも適用あり。 アセタフリドを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
発生初期		スピノ [®] エース顆粒水和剤	5	スピ [®] ノシン系 (スピ [®] ノサト [®])	散布	5,000倍	2回以内	施設栽培のみ使用可
発生初期		ハチハチフロアブル(劇)	39, 21A	(トルフェンピ [®] ラト [®])	散布	1,000倍	4回以内	
発生初期	オンシツコナシ [®] ラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	1B	有機リン系 (イソキサチオン)	散布	1,000倍	4回以内	シラメン及びアジアンタムを除く。イソキサチオンを含む農薬の総使用回数は4回以内とする。(カルホス微粒剤Fを既に使用した場合には散布不可)
発生初期	コナシ [®] ラミ類	チェス顆粒水和剤	9B	(ヒ [®] メトロシ [®] ン)	散布	5,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
発生初期		ベストガード [®] 水溶剤	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (ニテンヒ [®] ラム)	散布	1,000倍	4回以内	アブラムシにも適用あり。 ニテンピラムを含む農薬の総使用回数は4回以内とする。
栽培期間中		ラーナーブ [®]	7C	昆虫成長制御剤 (ヒ [®] リフ [®] ロキシフェン)	作物体の付近に設置	50m ² /10a	1回	施設栽培のみ使用可

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

花き類登録農薬一覧②

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適 用 病 害 虫	農 薬 名	RACコード	成 分 系	使用 方 法	使 用 量 希 釈 倍 数	使 用 回 数	注 意 事 項
発生初期	ハモク [・] リハ [・] エ類	アクタラ顆粒水溶剤	4A	ネオニコチノイド [・] 系 (チアメトキサム)	散 布	2,000倍	6回 以内	ミカンキイロアザミウマには1,000倍で適用あり。
発生初期		アフーム乳剤	6	マクロライト [・] (エマクチン安息香酸塩)	散 布	1,000倍	5回 以内	オオタバコガ [・] ヨトウムシ類にも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可。
発生初期	マメハモク [・] リハ [・] エ	トリカート液剤	17	I G R 剤 (シロマシ [・] ン)	散 布	1,000倍	4回 以内	クロバネキノコバエ類に土壌灌注:1,000倍、2L/m ² 使用回数1回で適用あり。
発生初期	ヨトウムシ類	ノーマルト乳剤	15	I G R 剤 (テ [・] フルヘ [・] ンス [・] ロン)	散 布	2,000倍	2回 以内	高温時の散布を避ける。
発生初期		アディオン乳剤	3A	ヒ [・] レスロイト [・] 系 (ヘ [・] ルメトリン)	散 布	2,000倍	2回 以内	カメムシ類、ハマキムシ類、アブラムシ類にも適用あり。ヒレスロイト [・] 系殺虫剤は、抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
発生初期		コテツフロアブル(劇)	13	ヒ [・] ロー [・] ル系 (クロルフェナヒ [・] ル)	散 布	2,000倍	2回 以内	ハダニ類、ミカンキイロアザミウマにも適用あり。
発生初期	ハスモンヨトウ	マツチ乳剤	15	I G R 剤 (ルフェエ [・] ロン)	散 布	2,000倍	5回 以内	
発生初期	オオタバコガ [・]	アクセルフロアブル	22B	セミカルハ [・] ソ [・] ン系	散 布	1,000倍	6回 以内	
発生初期		フレオフロアブル	UN	(ヒ [・] リタ [・] リル)	散 布	1,000倍	4回 以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
発生初期		フェニックス顆粒水和剤	28	シ [・] アミト [・] 系 (フルヘ [・] ンシ [・] アミト [・])	散 布	2,000倍	4回 以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
発生初期		ディアナSC	5	スヒ [・] ノシン系 (スヒ [・] ネトラム)	散 布	2,500倍	2回 以内	コナジラミ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
—	ハ [・] ッ [・] タ類 ハマキムシ類	スミチオン乳剤	1B	有 機 リ ン 系 (M E P)	散 布	1,000倍	6回 以内	アオムシ・アザミウマ類にも適用あり。
発生初期	ハタ [・] ニ類	テデオン乳剤	12D	(テ [・] トラシ [・] ホン)	散 布	500倍	10回 以内	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
発生初期		ヒラニカEW(劇)	21A	M E T I 剤 (テフ [・] フェンヒ [・] ラト [・])	散 布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
—		カネマイトフロアブル	20B	(アセキノシル)	散 布	1,000倍	1回	ばらを除く。
発生初期		ハロックフロアブル	10B	(エトキサソ [・] ール)	散 布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
発生初期		タニサラハフロアブル	25A	β-ケートニトリル誘導体 (シフルメトフェン)	散 布	1,000倍	2回 以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
発生初期		アクリメック(劇)	6	マクロライト [・] 剤 (アハ [・] メクチン)	散 布	500倍	5回 以内	アザミウマ類にも適用あり。
発生初期		エコピタ液剤	NC	(還元澱粉糖化物)	散 布	100倍	—	うどんこ病、アブラムシ類、コナジラミ類にも適用あり。幼虫・成虫に効果がある。
—		サンクリスタル乳剤	NC	(脂肪酸ク [・] リセリト [・])	散 布	600倍	—	発生初期に使用。うどんこ病にも適用あり。

- ※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型で整理しています。農薬の総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。
- ※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。
- ※ 薬剤の使用にあたり薬害がないかどうか細心の注意を払って使用して下さい。事前に散布試験をし、薬害の有無を確認してから散布を行って下さい。
- ※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。 ※ ラノーテープの使用については園芸担当者に相談して下さい。

◆交信かく乱剤

使用時期	適 用 病 害 虫	薬 剤 名	農 薬 の 成 分 系	設 置 量	使 用 目 的	使 用 方 法
対象作物の栽培全期間	コナカ [・] 、 オオタバコガ [・] 、 ヨトウカ [・]	コナガコンプラス	そ の 他	100 ～ 120 本 /10a (22g/100 本 製 剤)	交 尾 阻 害	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て、支持棒にデイスペンサーを巻き付け固定し園場に配置する。

- ※ 急傾斜地、風の強い地帯等、剤の濃度を維持するのが困難な地域では使用しない。
- ※ 対象害虫以外の害虫には効果がないため、登録薬剤を併用し慣行防除を行う。
- ※ コナガコンプラス使用については園芸担当者に相談して下さい。

◆展着剤(主に、水和剤・フロアブル剤に加用する。)

薬 剤 名	使 用 量 (希 釈 倍 数)	説 明
アプローチBI	10m ℓ / 散 布 液 10 ℓ (1,000 倍)	湿展性(付着性)・浸透性・濡れ性(均一性)があり、治療型殺菌剤への加用効果が大きい。薬剤を均一に付着・浸透させ、汚れを軽減。他剤に比べ高濃度で使用する機能性展着剤。
ハイテンパワー	2m ℓ / 散 布 液 10 ℓ (5,000 倍)	湿展性(付着性)・浸透性に優れ、泡立ち少ない。乳化、可溶化が主で洗浄作用が強い。ため固着性(耐雨性)は劣る。

- ※ 展着剤を加用する際の混用の順序： 展着剤希釈液を調整した後、他剤を加えて混合希釈液を調製する。
- 【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

樹木類登録農薬一覧

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病虫害	農薬名	RACコード	成分系	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
発病初期	うどんこ病	ホリハ [®] リン水和剤	M7	(イミノクタシン酢酸塩)	散布	1,000倍	3回以内	灰色かび病にも適用あり。 イミノクタシンを含む農薬の総使用回数は3回以内とする。
			19	抗生物質 (ホリオキシシン複合体)				
発生初期		サンヨール	M1	(DBEDC)	散布	500倍	8回以内	保護殺菌剤
発病初期		トップシンM水和剤	1	ベンゾ [®] イミタゾール系 (チオファネートメチル)	散布	1,000倍	5回以内	浸透性殺菌剤。チオファネートメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。特に連用を避ける。炭疽病、ごま色斑点病、輪紋葉枯病、斑点症にも適用あり。
発病初期		トリフミン水和剤	3	ステロール生合成阻害剤 (トリフルミゾール)	散布	3,000倍	2回以内	ステロール生合成阻害剤は耐性菌発生防止のため2回以内とする。
発病初期		フルピカフロアブル	9	アニリノピリミジン系 (メハニヒリム)	散布	2,000倍	5回以内	保護殺菌剤 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。 メハニヒリムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 灰色かび病にも適用あり。
発病前～ 発病初期		ショウチノスケフロアブル	U13	(フルチアニル)	散布	2,000倍	2回以内	新規有効成分フルチアニルとメハニヒリムとの混合剤。 メハニヒリムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
			9	アニリノピリミジン系 (メハニヒリム)				
発病初期	炭疽病	ヘンコセ [®] 水和剤	UN,M3	有機硫黄系 (マンセ [®] フ [®])	散布	600倍	4回以内	斑点症、枝枯細菌病(新梢伸長期～発病初期)にも適用あり。
発病初期		ヘルクト水和剤	M7	(イミノクタシアルベシル酸塩)	散布	1,000倍	3回以内	イミノクタシンを含む農薬の総使用回数は3回以内とする。
新梢伸長期～ 発病初期	枝枯細菌病	マイコシール [®]	41	抗生物質 (オキシテトラサイクリン)	散布	1,000倍	5回以内	
発病初期	斑点症	Zホ [®] ルト [®]	M1	(塩基性硫酸銅)	散布	800倍	—	輪紋葉枯病(500倍)にも適用あり。
—	カイカラムシ類(幼虫)	アプロート [®] フロアブル	16	昆虫成長制御剤 (フ [®] フ [®] ロフェシン)	散布	1,000倍	6回以内	カイカラムシ類の発生が見られる園で積雪等により発芽前の防除ができなかった場合には、融雪後から4月中旬頃までに散布する。
発生初期	カイカラムシ類	カルホス乳剤	1B	有機リン系 (イソキサチオン)	散布	1,000倍	6回以内	カイカラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。ケムシ類にも適用あり。
—		アタックオイル	NC	(マシン油)	散布	100倍	—	発芽後の散布は薬害が発生する恐れがあるので注意する。
幼虫発生期	ケムシ類	トレホン乳剤	3A	ヒレスロイト [®] 系 (エトフェン [®] ロックス)	散布	4,000倍	2回以内	シャクトリムシ類にも登録あり。オヒカハ(2,000倍)にも適用あり。 トレホン乳剤は抵抗性害虫出現防止のため総使用回数は2回以内とする。
発生初期		スタークル顆粒水溶剤	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (シ [®] ノテフラン)	散布	2,000倍	5回以内	
発生初期		アクセルフロアブル	22B	(メタフルミゾ [®] ン)	散布	1,000倍	6回以内	
発生初期	ハマキムシ類	ディアナSC	5	スヒ [®] ノシン系 (スヒ [®] ネトラム)	散布	2,500倍	2回以内	
—	アブラムシ類	スミチオン乳剤	1B	有機リン系 (MEP)	散布	1,000倍	6回以内	ゲンバイムシ類、フラバラゾウムシ、アメリカシロヒトリにも適用あり。オハリセンチュウは移植前 30分間根部浸漬 500倍1回で登録あり。
発生初期	クンマイムシ類	モスピラン顆粒水溶剤	4A	ネオニコチノイト [®] 系 (アセタミフ [®] リト [®])	散布	※2,000倍	5回以内	アセタミ [®] リトを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 まづはゲンバイムシ類に摘要無く、アブラムシ類4,000倍で摘要あり。
発生初期	アサミウマ類	オルトラン水和剤	1B	有機リン系 (アセフェート)	散布	1,000倍	5回以内	アセフェートを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
発生初期	シャクトリムシ類	ハ [®] タンSG水溶剤	14	ネライストキシン系 (カルタフ [®])	散布	1,500倍	3回以内	

※ 薬剤を対象病虫害ごとに剤型で整理しています。農薬の総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※ 薬剤の使用にあたり薬害がないかどうか細心の注意を払って使用して下さい。事前に散布試験をし、薬害の有無を確認してから散布を行って下さい。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

雑草・害虫(ナメクジ類・カタツムリ類)防除農薬一覧

JA山形おきたま花卉振興会

◆雑草の防除

耕種的・物理的防除

- は種(定植)前に間隔をあけて2回耕起することにより雑草の発生を軽減できる。これは、1度軽く耕起することで一斉に雑草を発芽させ、これをは種前にもう一度耕起してすき込む方法である。
- 水田転作畑では、いったん水田に戻し田畑輪換を行う。
- 中耕(培土)を行う。
- 土壌の蒸気消毒や太陽熱消毒を行う。
- マルチ栽培を導入し、畝間に防草シートを設置する。

花きに除草剤を使用する場合の一般的留意事項

- 薬量並びに散布面積は正確に秤量、測定する。
- 除草剤をすすめる水の量は、容器のラベルをよく確認し、表示より濃い濃度、多い量で使わないよう適正な水量で散布する。
- 散布機具及び容器は専用のものを使用し、使用後は石鹸水で十分洗う。
- 薬効は土壌水分との関連が深く、乾燥状態では効果が低い。散布直後の降雨は、除草効果を低くするばかりではなく、薬害を起こす危険性もあるので、降雨が予想される場合は使用を避ける。
- 現在の除草剤だけでは、完全な除草効果は期待できないので、中耕土寄せ、敷ワラ、ポリマルチ等、総合的な対策を行うことが重要である。
- 土壌散布後3～4週間は土壌をかくはんしない方が効果期間が長い。
- 水田転作畑での使用は、土塊をよく砕き、土壌表面を均一にする。
- 催芽種子をは種した場合は、薬害の恐れがあるので、除草剤の使用は避ける。
- 散布に使用した器具及び容器を洗った水や残液は、川や池等に流入しないよう注意する。
- ハウス内での除草剤の使用は薬害が発生しやすいので避ける。

薬剤による防除

作物名	除草剤名・（作用機作）	適用雑草名	使用時期	使用方法	使用量／散布液量（10a当たり）	使用回数	注 意 事 項
花き類・観葉植物	プリグロックSL （光活性化による毒物の生成）	1年生雑草	畦間処理：雑草生育期（草丈20cm以下）	雑草茎葉散布	600～1,000mℓ/100～150ℓ	3回以内	作物に飛散しないよう注意する。 非選択性接触型茎葉処理除草剤で、イオンの力で、雑草の細胞を破壊する。展着剤を加用する場合は非イオン系展着剤を使用する。
樹木類		雑草成育期（草丈30cm以下）					
花き類・観葉植物	ラウンドアップマックスロード* （アミノ酸合成阻害）	1年生雑草	耕起前まで（雑草生育期）	雑草茎葉散布	200～500mℓ/50～100ℓ	2回以内	（少量散布の場合） 200～500mℓ/25～50ℓ/10a
樹木類		多年生雑草	雑草生育期	雑草茎葉散布	200～500mℓ/50～100ℓ	4回以内	作物に飛散しないよう注意する。 （少量散布の場合） 1年生雑草：200～500mℓ/5～50ℓ/10a 多年生雑草500～1000mℓ/5～50ℓ/10a スキナ：1500～2000mℓ/25～50ℓ/10a
		スキナ			500～1,000mℓ/50～100ℓ		
花き類・観葉植物		ハスタ液剤 （アミノ酸合成阻害）	1年生雑草	雑草生育期	雑草茎葉散布	300～500mℓ/100～150ℓ	3回以内
	1年生雑草		雑草生育期畦間処理（草丈20cm以下）	雑草茎葉散布	300～500mℓ/100～150ℓ		
花き類・観葉植物	ザクサ液剤 （アミノ酸合成阻害）	1年生雑草	雑草生育期畦間処理	雑草茎葉散布	300～500mℓ/100～150ℓ	3回以内	
樹木類			雑草生育期				
きく	ナブ乳剤 （脂肪酸・フラボノイド合成阻害）	1年生イネ科雑草（スズメノカタビラを除く）	雑草生育期（イネ科雑草3～5葉期）	雑草茎葉散布又は全面散布	150～200mℓ/100～150ℓ	3回以内	遅効性で枯死するまでに5～10日必要。広葉雑草及びカヤツリグサ科、スズメノカタビラには効果がない。また、イネ科作物には薬害があるので飛散しないよう注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 （生育抑制型・微小管重合阻害）	1年生雑草	定植前（雑草発生前）	全面土壌散布	200～400mℓ/70～150ℓ	1回	キ科雑草とツクサには効果が劣る。
りんどう	ナブ乳剤 （脂肪酸・フラボノイド合成阻害）	1年生イネ科雑草（スズメノカタビラを除く）	雑草生育期（イネ科雑草3～6葉期）	雑草茎葉散布又は全面散布	150～200mℓ/100～150ℓ	3回以内	遅効性で枯死するまでに5～10日必要。広葉雑草及びカヤツリグサ科、スズメノカタビラには効果がない。また、イネ科作物には薬害があるので飛散しないよう注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 （生育抑制型・微小管重合阻害）	1年生雑草	萌芽前（雑草発生前）	全面土壌散布	200～400mℓ/70～150ℓ	1回	キ科雑草とツクサには効果が劣る。
樹木類	トレファノサイト粒剤2.5 （生育抑制型・微小管重合阻害）	1年生雑草（ツクサ科、カヤツリグサ科、キ科、アラナ科を除く）	植付後・生育期（雑草発生前）	畦間・株間土壌散布	4～5kg/10a	2回以内	トレファノサイト乳剤と合わせて2回以内
ひまわり	トレファノサイト乳剤 （生育抑制型・微小管重合阻害）		は種後出芽前	全面土壌散布	200～300mℓ/100ℓ	1回	施設栽培では使用しない。
ゆり			植付後～萌芽前	全面土壌散布		1回	
チューリップ			定植後	畦間土壌散布		1回	
シヤクヤク			植付後・生育期（雑草発生前）	畦間・株間土壌散布		2回以内	トレファノサイト粒剤2.5と合わせて2回以内
きく（露地栽培）			は種直後	全面土壌散布	300mℓ/100ℓ	1回	施設園芸では使用しない。

◆ナメクジ類・カタツムリ類の防除

耕種的・物理的防除

- 湿潤な場所に発生が多いので、ほ場の排水を良くし、ほ場の環境を改善する。
- 餌となる作物残さや雑草などをほ場内から除去し、清潔にする。
- 石灰の不足した酸性土壌に発生が多いので、定植前に石灰資材を施用し、中性からやや酸性の土壌に改良する。
- 施設栽培では、夏期に太陽熱消毒を行うことによりハウス内のナメクジ類を完全に防除できる。※太陽熱消毒方法についてP7を参照

薬剤による防除

適用病害虫	農薬名	区分	使用量・希釈倍数	適用場所	使用回数	使用方 法
カタツムリ類、ナメクジ類	マイキラー	劇	100～200倍 100～300L/10a	花き類・観葉植物栽培温室等の 生息地 ほ場周辺雑草地の生息地	6回以内	作物にかからないように土壌表面散布する。
	スラゴ*		1～5g/㎡	温室、ハウス、圃場、花壇	—	ナメクジ類及びカタツムリ類の発生あるいは加害を受けた場所または株元に配置する。

※ 注意事項 連続降雨などで多量に水分を含むと効果が落ちるので、晴れ間を狙って防除する。 【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

2022年度 害獣（野そ・モグラ・イノシシ）対策について

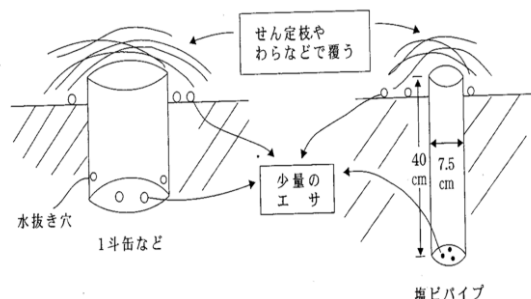
JA山形おきたま花卉振興会

◆野その防除

耕種的・物理的防除

秋季（根雪前）、春季、夏季に、

- 野そが侵入・定着しないよう、ほ場や周辺の清掃・除草や隠れ場所となるような資材の撤去を行う。
- 野そ増殖を抑制するため、ほ場内に餌となる農作物残渣（りんどうの茎葉など）を残さない。
- ネズミとり器や粘着板を利用する。この際、野そは暗所を好むこと、また壁などに沿って移動する習性を利用し、ネズミとり器は壁面に肥料袋などで覆って設置する。また、ネズミとり器を設置後数日は、ネズミとり器の周辺に餌をまき警戒心を与えないように配慮する。
- 簡易なトラップを利用した駆除も周年駆除法として有効。
10a当たり5～6か所に、1斗缶や、塩ビパイプ（直径7.5cm×40cm）等を上部1～2cm残して地中に埋め、上部の穴をせん定枝やわらで広く覆い、時々捕殺を確認する。（下図参照）



ハウス内作物の野そ対策

- 野そが侵入・定着しないよう、ハウス内には隠れ場所となるような資材を置かない。
- ハウスの外縁部は内側、外側とも踏み固めておく。
- 野そが侵入した場合は、そ穴や通路（作物の残渣を引き込んだり糞が見られる場所）に金網製の「ネズミとり器」や「粘着板」を置いて捕殺する。
※ 野そは暗い場所に落ち着き、壁などに沿って移動する習性があるため、捕獲器は、壁面に肥料袋などで覆っておく。捕獲器の設置後数日は捕獲器周辺に餌をまいて捕獲器への警戒心を与えないように配慮する。発生が多い場所では、周年設置して被害を防ぐこと、ハウス周辺の環境をきれいにし同時に防除対策も行う。

薬剤による防除 水田、畑地、果樹園、桑園は下記の薬剤により防除する。

- 農作物の少ない秋季および春季の防除を徹底する。
- ※ ペットや家畜への二次的な危害を防止するため、家畜施設や住宅地周辺では使用しない。

(1) リン化亜鉛剤

対象害獣	農薬名	農薬の成分系	使用量	適用場所	使用方法
野そ	強力ラテミン (劇)	リン化亜鉛	1～2g(15～30粒)/そ穴1か所	農地 山林	そ穴に1か所あたり1～2g(15～30粒)宛そのままあるいは小袋詰を投入する。
	Z・P (劇)	リン化亜鉛	30～500g/10a	農地 山林	定点配置・そ穴投入・バラまき等をする。

(2) ダイファシン系粒剤

対象害獣	農薬名	農薬の成分系	使用量	適用場所	使用方法
野そ	ヤンデオン (劇)	ダイファシン	200～300g/10a	農地	本剤5gをそのまま、あるいは5gの小袋詰をそ穴に投入するか、野その通路に配置する。

◆モグラの防除

耕種的・物理的防除

- 振動を嫌う性質があるので、ほ場のととところろに風車を立て、その振動が地中に伝わるようにする。
- 周囲に深さ1m程度の溝を掘り、ほ場への侵入を防ぐ。
- トンネルの本道に罠を仕掛けて捕殺する。この場合、人のにおいがつかないように素手では持たない。

◆イノシシ対策

イノシシを寄せ付けない環境作りと物理的防除

- ほ場周辺や耕作放棄地の除草を定期的に行い、イノシシの隠れ家となるような場所を作らない。
- イノシシの餌となる農作物残渣（収穫残渣や間引いた株など）をほ場内に残さない。
※ 収穫せずに放置された果樹は、イノシシの格好のエサ場となることから、地域の合意の上で可能な限り伐採する。
- 防護柵（電気柵等）を設置し、イノシシの侵入防止に努める。（電気柵は感電防止の為、人が安易に立ち入らない場所に設置し、危険表示板を複数設置する。）

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

花き類耕種的・物理的防除、発生予察に基づく防除

JA山形おきたま花卉振興会

対象病虫害名	防除方法	
病虫害全般	1. ほ場周辺を含め、除草に努める。 2. 連作をしない。	
病害全般	1. 排水対策を徹底する。 2. 施設栽培では、過湿を防ぐため換気を図る。	
立枯病、青枯病などの 土壌病害	1. 土壌を蒸気消毒する。	
	病虫害名	消毒の方法
	立枯病、青枯病等の土壌病害	60℃で30分間または80℃以上10～15分間均一に行う。 なお、カーネーションでは80℃以上10～15分間とする。
	2. 土壌還元消毒する。次項を参照のこと。	
ハウス土壌還元消毒 (塩類集積改善、連作 障害対策)	1. 有機質資材(10aあたり米ぬか等1,000kg)を施用し、耕土層よく混ざるように耕うんする。 2. 耕うん後に、かん水チューブを90cm間隔で設置し、透明のビニール等で地表全面を被覆した後に均一になるようかん水し、湛水状態にする。 ※既存のかん水設備のある圃場では、かん水後に被覆してもよい。 3. ハウスを密閉し、『目標地温30度、20日間』、温度を確保する。還元化が進行している目安として密閉後3～5日でどぶ臭の発生を確認する。 4. 処理後は被覆資材を除去し、乾燥させた後、2～3回の耕うんにより十分な酸化状態に戻す。	
ウイルス ウィロイド病害	1. アザミウマ類、アブラムシ類等を介して感染が拡大するので、殺虫剤の適期防除を心がける。 2. 繁殖用の球根、木子、球芽は健全株から採取する。 3. 施設栽培では出入り口や側面に寒冷紗を張り媒介する昆虫の侵入を防ぐ。 4. 発病株は直ちに抜き取り、圃場外に隔離し焼却する等、適切な処分をする。 5. 発病株に触れた手で健全株に触れない。 6. <u>汁液により感染するため、収穫に使うハサミは使用の度に家庭用塩素系漂白剤等の次亜塩素酸ナトリウムに15分浸漬し拭き取る。</u> <u>※簡易的な処理方法として液に2分間浸漬後、20秒流水で洗い流して拭き取る方法もある。</u> <u>※防護メガネ・マスク・炊事用手袋は必ず着用する。</u> <u>※金属製及びメラミン製の容器には入れない。※ハサミの金属が腐食することもあるため注意する。</u>	
ハダニ類	1. ハダニ類の被害は急速に拡大するので、発生初期から適期防除を徹底する。 2. 茎葉への散水によりハダニ類の密度を減らすことが期待出来る。	
チョウ目害虫 アブラムシ類 コナジラミ類 アザミウマ類	◇物理的防除 ・施設栽培では、出入り口や側面に寒冷紗を張る。 ◇発生予察に基づく防除 ・ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病虫害の発生時期や発生量（飛来・侵入・増殖の状況）を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色、アザミウマ類は青色に誘引される。	
ミカンキイロアザミウマ	◇耕種的防除 ・施設では成虫の侵入を防止するため開口部に防虫ネット(300番:1mm目以下)を設置する。 ・成虫を絶食状態にすると数日で死滅するので、施設では収穫終了後完全に密閉し、さらに作物及び雑草を枯死させる。 ・露地の発生ほ場では、収穫が終了したら被害植物は適切に処分する。 ・ほ場及びほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草を徹底する。 ◇発生予察に基づく防除 ・ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置、対象病虫害の発生時期や発生量（飛来・侵入・増殖の状況）を早期に把握、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色、アザミウマ類は青色に誘引される。	
土壌線虫	◇ 耕種的防除 ・連作をしない。 ・抵抗性品種を作付けする。 ・ネグサレセンチュウの発生しているほ場では、マリーゴールド(フレンチ種またはアフリカントール)を3ヶ月以上栽培(輪作)し、すき込む。 ・さといもとの輪作でキタネグサレセンチュウの密度を低下させることができる。 ・ネコブセンチュウの発生しているほ場では、マリーゴールド(アフリカントール)やクロタリヤ、ヘイオーツを3ヶ月以上栽培し、すき込む。 ◇物理的防除 ・太陽熱消毒する。	
タネバエ	・魚かす、油かす、米ぬか、牛糞、鶏糞、堆肥等、有機物を施用するとタネバエが発生しやすくなる。特に、未熟なものは完熟したものに比べ発生が多くなる。有機物を施用する場合は、早めに施用してすき込むとともに出芽を促すため碎土を丁寧に行う。	
モグラ	◇耕種的防除 ・振動を嫌う性質があるので、ほ場のところどころに風車を立て、その振動が地中に伝わるようにする。 ・周囲に深さ1m程度の溝を掘り、ほ場への侵入を防ぐ。 ・トンネルの本道に罠を仕掛けて捕殺する。この場合、人のおいがつかないように罠を素手で持たない。	
ナメクジ類 カタツムリ類	◇耕種的防除 ・湿潤な場所に発生が多いため、ほ場の排水を良くし、ほ場の環境を改善する。 ・餌となる作物残渣や雑草などをほ場内から除去し、清潔にする。 ・石灰の不足した酸性土壌に発生が多いので、定植前に石灰資材を施用し、中性からやや酸性の土壌に改良する。 ・太陽熱消毒をする。太陽熱消毒とはハウスにおいて7月中旬～8月下旬の夏期高温時を利用して約1カ月高温状態を保ち、土壌中のナメクジなどの生息密度を低下させることができる。また、雑草の防除や土壌病害の抑制にも効果が見られる。	

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

アルストロメリア病害虫防除基準

JA山形おきたまアルストロメリア振興部会

使用 時期	適用病害虫	農薬名	使用 方法	使用量 希釈倍数	使用 回数	注意事項
生 育 期	灰色かび病	アフェットフロアブル	散布	2,000倍	2回 以内	発病初期 浸透性殺菌剤、耐性菌防止のため使用回数は2回まで。
		フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回 以内	予防剤 発病初期 高温時に薬害の恐れがあるので注意 する。
		ゲッター水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	予防・治療剤 耐性菌を考慮し連用を避ける。
		ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回 以内	発病初期 うどんこ病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類に も適用あり。
		ボトキラー水和剤	ダクト内 投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤 発病前～発病初期
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬 剤との混用は避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には 1000倍(灌注1ℓ/㎡)で適用あり。
		ロディー乳剤(劇)	散布	1,000倍	2回 以内	合成ピレスロイド剤は抵抗性害虫出現防止のため連用は 避ける。 ハダニ類にも適用あり。
	アザミウマ類	カウンター乳剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期
		アフアーム乳剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類に は1,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
		ディアナSC	散布	2,500倍	2回 以内	発生初期 高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあ るので注意する。オオタバコガ、ハモグリバエ類、コナジラミ類に も適用あり。
	ミカンキイロアザミウマ	アクタラ顆粒水溶剤	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期 ハモグリバエ類には2000倍で適用あり。
	コナジラミ類	チェス顆粒水和剤	散布	5,000倍	4回 以内	発生初期に使用。アブラムシ類にも適用あり。
		ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 同成分のベストガード粒剤と併せて総使用回 数は4回以内とする。アブラムシ類にも適用あり。
		ラノーテープ	作物体の 付近に 設置	50㎡/10a	1回	栽培期間中 作物体の付近に設置する。
	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回 以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウにも適用あり。
	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期に使用。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生 する恐れがあるので注意する。
		オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期に使用。アザミウマ類、アブラムシ類、アオムシにも適用あり。
		コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期に使用。ハダニ類、ミカンキイロアザミウマにも適 用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れ があるので注意する。
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。卵・幼虫・成虫に効果がある。
		テデオン乳剤	散布	500倍	10回 以内	発生初期に使用。卵・幼虫に効果がある。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。卵・幼虫には効果があるが成虫には効 果なし。
		ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回 以内	発生初期に使用。卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	散布	500倍	5回 以内	発生初期に使用。アザミウマ類にも適用あり。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤、発生初期に使用。うどんこ病、コナジラミ類、 アブラムシ類にも適用あり。
		サンクリスタル乳剤	散布	600倍	—	うどんこ病にも適用あり。
	ウイルス病	発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。 ※ウイルス病の症状がみられた土壌では、新植・改植を行う前に土壌消 毒を行う。 ※ウイルスは、アブラムシ類・アザミウマ類などの媒介昆虫によって伝 搬されるので、それらの防除を徹底する。				発病株に触れた手で健全株に触れない。ハサミ等も同様。 ハサミの消毒はビストロン等の第3リン酸ナトリウム液でこ まめに行う。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。)

※ラノーテープの使用については園芸担当者に相談して下さい。

◇耕種的・物理的防除 灰色かび病：多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

◇発生予察に基づく防除 ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ダリア病害虫防除基準

JA山形おきたまダリア振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植前	立枯病	リゾレックス粉剤	土壌混和	50kg/10a	1回	
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	定植時
生育期	立枯病	オーソサイド水和剤80	散布	600倍	8回以内	予防剤 苗立枯病、茎腐病にも適用あり。
	うどんこ病	アンビルフロアブル	散布	1,000倍	2回以内	予防剤 発病初期 EBI剤は耐性リスクがあるため、総使用回数は2回以内とする。
		カリグリーン	散布	800倍	—	予防剤 発病初期
		サンヨール	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
		パンチョTF顆粒水和剤	散布	2,000倍	2回以内	
		ショウチノスケフロアブル	散布	2,000倍	2回以内	発病前～発生初期 新規有効成分フルチアニルとメバニピリムとの混合剤。
		ポリオキシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	灰色かび病	フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 発病初期 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。
		ゲッター水和剤	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤 連用により耐性菌が懸念されるので注意する。
	うどんこ病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類	花華やか 顆粒水溶剤	散布	500倍	5回以内	予防剤 発生初期 高温時は薬害の恐れあり。
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回以内	発生初期 アザミウマ類、ヨトウムシ類、アオムシにも適用あり。
		アドマイヤーフロアブル	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アドマイヤー1粒剤と合わせて5回以内
		アドマイヤー1粒剤	株元散布	2g/株	5回以内	アドマイヤーフロアブルと合わせて5回以内
	アザミウマ類	スミチオン乳剤	散布	1,000倍	6回以内	バッタ類、アオムシにも適用あり。
		カウンター乳剤	散布	2,000倍	5回以内	発生初期
		モスピラン顆粒水溶剤(劇)	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
		ハチハチフロアブル(劇)	散布	1,000倍	4回以内	発生初期
		アフーム乳剤	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類には1000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
	オンシツコナジラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	散布	1,000倍	4回以内	発生初期
	コナジラミ類	ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ハダニ類、ミカンキイロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	散布	1,000倍	6回以内	発生初期
		プレオフロアブル	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
		ディアナSC	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。コナジラミ類アザミウマ類、ハモグリバエ類にも適用あり。
	ハダニ類	テデオン乳剤	散布	500倍	10回以内	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		カネマイトフロアブル	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。アザミウマ類にも適用あり。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤、発生初期 うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
		サンクリスタル乳剤	散布	600倍	—	うどんこ病にも適用あり。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。)

◇ウイルス・ウィロイド性病害：繁殖用の球根、球芽は健全株から採取する。発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。

発病株に触れた手(ハサミ)で健全株に触れない。ハサミの消毒は家庭用塩素系漂白剤等の次亜塩素酸ナトリウム液でこまめに行う。

◇発生予察に基づく防除 ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

露地ダリア病害虫防除暦

JA山形おきたまダリア振興部会

使用 時期	適用病害虫	RAC コード	農薬名 ※()は劇物	使用 方法	使用量 希釈倍数	使用 回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	1B	カルホス微粒剤F(劇)	作業処理 土壌混和	6kg/10a	1回	
6月上旬	バッタ類・ アオムシ	1B	スミチオン乳剤	散布	1,000倍	6回以内	ハマキムシ類、アザミウマ類にも適用あり。
6月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	M1	サンヨール①	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
7月上旬	アブラムシ類・ アオムシ	1B	オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回以内	発生初期に使用。アザミウマ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
7月中旬	ヨトウムシ類・ ハダニ類	13	コテツフロアブル(劇)①	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
7月下旬	ハダニ類	6	アグリメック(劇)	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。アザミウマ類にも適用あり。
8月1週	オオタバコガ	28	フェニックス顆粒水和剤①	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
8月2週	アザミウマ類	4A	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
8月3週	オオタバコガ・ アザミウマ類	5	ディアナSC①	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。コナジラミ類、ハモグリバエ類にも適用あり。
8月4週	うどんこ病・ アザミウマ類	19	ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発生初期(発生初期) 灰色かび病、黒斑病、ハダニ類にも適用あり。
9月1週	オオタバコガ	UN	ブレオフロアブル①	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
9月2週	オオタバコガ	28	フェニックス顆粒水和剤②	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
9月3週	オオタバコガ・ アザミウマ類	5	ディアナSC②	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。コナジラミ類、ハモグリバエ類にも適用あり。
9月4週	オオタバコガ	UN	ブレオフロアブル②	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
10月上旬	ヨトウムシ類・ ミカンキイロアザミウマ・ ハダニ類	13	コテツフロアブル(劇)②	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
10月中旬	うどんこ病・ハダニ類 アブラムシ類・ アザミウマ類	4A、 6、3	花華やか 顆粒水溶剤	散布	500倍	5回以内	予防剤 発生初期 高温時は被害の恐れあり。 アファーム(エマメクセン)と併せて総使用回数5回以内とする。
10月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	M1	サンヨール②	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。

※病害虫の発生がみられた場合は、前ページのダリア病害虫防除基準を参考に、追加で防除を実施しましょう。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

ダリアの葉・茎・花を 食害する虫

(平成23、24年度置賜総合支庁
産地研究室研究成績書より)



ハスモンヨトウ幼虫(中齢)



ヨトウガ幼虫(老齢)



フキノメイガ幼虫



ハスモンヨトウ成虫



ヨトウガ成虫



フキノメイガ成虫



オオタバコガ卵



オオタバコガ幼虫



オオタバコガ成虫

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

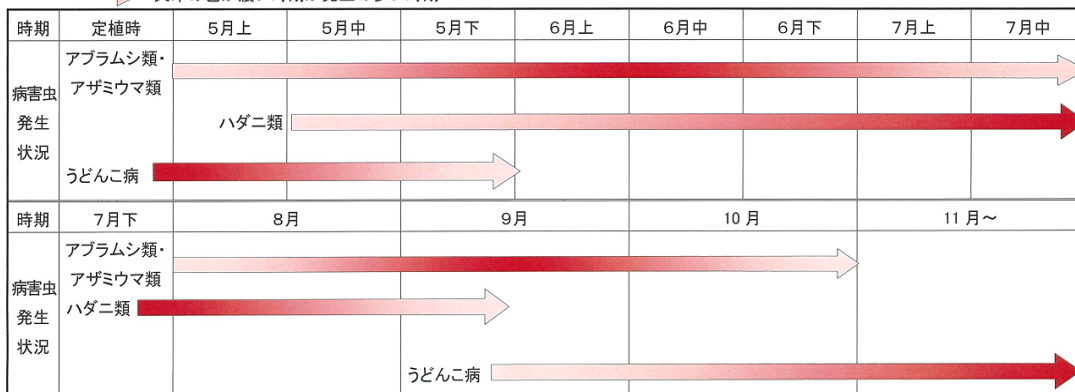
ハウスダリア病害虫防除暦

JA山形おきたまダリア振興部会

使用時期	適用病害虫	RACコード	農薬名 ※()は劇物	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	1B	カルホス微粒剤F(劇)	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	
5月上旬	うどんこ病	NC	カリグリーン	散布	800倍	—	予防剤 発病初期
5月中旬	うどんこ病	19	ポリオキシンAL水溶剤①	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
5月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	M1	サンヨール①	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
6月上旬	アザミウマ類	4A	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
6月中旬	ヨトウムシ類・ ハモグリバエ類	6	アフーム乳剤	散布	1,000倍	5回以内	発生初期 オオタバコガにも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
6月下旬	うどんこ病・ ハダニ類	—	サンクリスタル乳剤①	散布	600倍	—	
7月上旬	アザミウマ類	6	アグリメック(劇)	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。ハダニ類にも適用あり。
7月中旬	ヨトウムシ類・ ハダニ類	13	コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ミカンキロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
7月下旬	ハダニ類	10B	バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
8月上旬	ハダニ類	12D	テデオン乳剤	散布	500倍	10回以内	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
8月下旬	ハダニ類	25A	ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
9月上旬	うどんこ病・ アザミウマ類	19	ポリオキシンAL水溶剤②	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病、黒斑病、ハダニ類にも適用あり。
9月中旬	アブラムシ類	9B	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
9月下旬	うどんこ病・ ハダニ類	—	サンクリスタル乳剤②	散布	600倍	—	
10月上旬	コナジラミ類	4A	ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
10月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	M1	サンヨール②	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
11月上旬	うどんこ病	U6	パンチョTF顆粒水和剤	散布	2,000倍	2回以内	

ハウスダリアの病害虫発生予想

→ 矢印の色が濃い時期が発生の多い時期



※ハウスサイドに寒冷沙を設置した場合の防除暦

※薬剤を初めて使用する場合は必ず試し散布をして下さい。また、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※高温時の散布で薬害が発生する恐れがありますので、早朝等の涼しい時間帯に防除を実施して下さい。

※使用時期はあくまで目安であり、発生状況を確認しながら防除を実施して下さい。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

啓翁桜病虫害防除暦

JA山形おきたま枝物振興部会

使用時期	適用病虫害	農薬名 ※()は回数	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
病枝切除後	てんぐ巢病	トップジンMペースト	塗布	原液	5回 以内	病枝切除後に使用。トップジンM水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
発芽前	カイガラムシ類	スプレーオイル	散布	50倍	—	高温時の散布では薬害を生じやすいので注意する。
—	カイガラムシ類幼虫	アブロードフロアブル(1)	散布	1,000倍	6回 以内	カイガラムシ類の発生が見られる園で積雪等により発芽前の防除ができなかった場合には、融雪後から開花期までに散布する。
展葉始期～ 展葉期	幼果菌核病	トップジンM水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発病初期 うどんこ病、炭疽病、ごま色斑点病、輪紋葉枯病、斑点症にも適用あり。トップジンMペーストは同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
		サンリット水和剤	散布	2,000倍	3回 以内	予防・治療剤
5月中旬	コスカシバ	スカシバコンL	枝等に まぎつけ 固定する	40～100本 /10a	—	成虫発生初期～終期。8g/100本製剤
5月下旬	カイガラムシ類幼虫 (ウメシロカイガラムシ)	カルホス乳剤(劇)(1)	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期。 カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。
		アブロードフロアブル(2)	散布	1,000倍	6回 以内	
6月中旬	カイガラムシ類幼虫 (ナシマルカイガラムシ)	カルホス乳剤(劇)(2)	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期。 カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。
		アブロードフロアブル(3)	散布	1,000倍	6回 以内	
6月下旬～ 7月上旬	ケムシ類	フェニックスフロアブル(1)	散布	4,000倍	2回 以内	発生初期
		アクセルフロアブル	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期
	ケムシ類 シャクトリムシ類	トレボン乳剤	散布	4,000倍	2回 以内	幼虫発生期。合成ピレスロイド剤であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。オビカレハには2,000倍で適用あり。
7月中旬	カイガラムシ類幼虫 (カツラマルカイガラムシ)	カルホス乳剤(劇)(3)	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期。 カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。
		アブロードフロアブル(4)	散布	1,000倍	6回 以内	
8月中旬	カイガラムシ類幼虫 (ウメシロカイガラムシ 第2世代、 ナシマルカイガラムシ 第2世代)	カルホス乳剤(劇)(4)	5月下旬、6月中旬、7月中旬、9月下旬～10月上旬の防除と合わせて総使用回数6回以内とする。			
9月上旬	ケムシ類	フェニックスフロアブル(2)	散布	4,000倍	2回 以内	発生初期
9月下旬～ 10月上旬	カイガラムシ類幼虫 (カツラマルカイガラムシ 第2世代)	カルホス乳剤(劇)(5)	5月下旬、6月中旬、7月中旬、8月中旬の防除と合わせて総使用回数6回以内とする。			

植物成長調整剤

使用時期	使用目的	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
休眠期 (促成開始前)	休眠打破による 発芽促進	CX-10	切り枝全面 散布又は 切り枝浸漬	20～50倍	1回	温湯処理と併用する場合は、低温遭遇時間により20～50倍で効果が期待できる。
休眠期	休眠打破による 生育促進	ジベレリン		25～50ppm	1回	温湯処理と併用する場合は、低温遭遇時間により25～50ppmで効果が期待できる。

除草剤

使用 時期	適用雑草名	農薬名	使用 方法	液量/希釈水量 (10a当たり)	使用 回数	注意事項
雑草生育期	一年生雑草	ラウンドアップマックスロード	雑草茎葉 散布	200～500mℓ /50～100ℓ	4回 以内	作物に飛散しないように注意する。 ザクサ液剤とバスタ液剤は合わせて3回以内
雑草生育期		バスタ液剤		300～500mℓ /100～150ℓ	3回 以内	
雑草生育期		ザクサ液剤		300～500mℓ /100～150ℓ		

※薬剤を対象病虫害ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※温湯処理と併用する場合、低温遭遇時間(8℃以下)の目安は800時間以下です。低温遭遇時間については農業技術普及課にご確認下さい。

◇耕種的・物理的防除：幼果菌核病： 園地の圃場環境改善のため、消雪後全面耕うんし、被害葉、被害果をすき込むとともに地表面の乾燥を図る。

発病の多い枝は、切り取り適正に処分する。除草を徹底する等、過湿とならないよう園地を管理する。

コスカシバ： コスカシバの食入した所にはヤニ(虫糞)が出ているので見つけしだい捕殺する。

◇発生予察に基づく防除：粘着テープを樹の枝に巻きつけたトラップでカイガラムシ幼虫発生を把握し、低密度時の早期防除に努める。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

トルコぎきょう病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
植付前	株腐病 根腐病 青枯病 立枯病	ガスタード微粒剤(劇)	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いので商品のラベルを要確認。
育苗中	クロバネキノコバエ類	トリガード液剤	土壌灌注	1,000倍	1回	発生初期。土壌灌注はジョウロ等を使って2L/㎡に散布することである。
定植時	アブラムシ類 アザミウマ類	オルトラン粒剤	株元散布	6kg/10a	5回以内	発生初期 ヨトウムシ類にも適用あり。オルトラン水和剤と併せて5回以内とする。
生育期	灰色かび病	アフエットフロアブル	散布	2,000倍	2回以内	予防剤 発病初期。浸透性殺菌剤、耐性菌出現防止のため使用回数は2回まで。
		フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 発病初期 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。
		ゲッター水和剤	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤 同成分を含むトップジンM水和剤と併せて5回以内とする。連用により耐性菌が懸念されるので注意する。
		ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期 うどんこ病、黒斑病、斑点病、ハダニ類にも適用あり。
	斑点病	ダコニール1000	散布	1,000倍	6回以内	うどんこ病にも適用あり
		パレード20フロアブル	散布	2,000倍	3回以内	発病初期。うどんこ病にも4,000倍で適用あり
	ミカンキイロアザミウマ	モスピランジェット(劇)	くん煙	50g/400㎡	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。モスピラン顆粒水溶剤と合わせて5回以内(400㎡＝床面積200㎡×高さ 2m)
		アクタラ顆粒水溶剤	散布	1,000倍	6回以内	発生初期 コナジラミ類、ハモグリバエ類にも2,000倍で適用あり
	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用ありモスピランジェットと合わせて5回以内
		ディアナSC	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 高温時に薬害の恐れあり。 オオタバコガ、ハモグリバエ類にも適用あり。
	アザミウマ類 アブラムシ類	スカウトフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回以内	合成ピレスロイド剤であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 IBR剤新しいタイプの殺虫剤。コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
	ハスモンヨトウ	マッチ乳剤	散布	2,000倍	5回以内	発生初期
	ヨトウムシ類	コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
	オオタバコガ	プレオフロアブル	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
	ハモグリバエ類	アフーム乳剤	散布	1,000倍	5回以内	発生初期 オオタバコガ、ヨトウムシ類にも適用あり。アザミウマ類に2,000倍で適用あり。
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		カネマイトフロアブル	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤 発生初期 コナジラミ類、うどんこ病、アブラムシ類にも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
生育促進	生育期間中に ロゼット化した時	ジベレリン	茎葉散布	50～100ppm	1回	30～40ℓ/10a

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。)

◇耕種的・物理的防除: 灰色かび病: は、多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

シロイチモジヨトウ・ハスモンヨトウ: ハウスの出入口や側面に5mm目以下の防虫ネットを張る。

◇発生予察に基づく防除: ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ヒマワリ病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用 時期	適用病害虫	農薬名	使用 方法	使用量 希釈倍数	使用 回数	注意事項
生育期	べと病 茎腐病 黒斑病 立枯病 苗立枯病	オーソサイド水和剤80	散布	600倍	8回 以内	予防剤
	斑点病	ゲッター水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	灰色かび病にも適用あり。※トップジンM水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
	菌核病	トップジンM水和剤	散布	1,500倍	5回 以内	ゲッター水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
	うどんこ病	ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回 以内	予防剤 発病初期(発生初期) 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	灰色かび病	フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回 以内	予防剤 発病初期
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には1000倍(灌注1ℓ/㎡)で適用あり。
		オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 アザミウマ類、ヨトウムシ類、アオムシ、タバコガにも適用あり。
		ロディー乳剤(劇)	散布	1,000倍	2回 以内	ハダニ類にも適用あり。合成ピレスロイド剤は抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
		アドマイヤーフロアブル	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 アドマイヤー1粒剤と合わせて5回以内
		アドマイヤー1粒剤	株元散布	2g/株	5回 以内	アドマイヤーフロアブルと合わせて5回以内
	アザミウマ類	アフーム乳剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類に1,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
	ミカンキイロアザミウマ	アクタラ顆粒水溶剤	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期 ハモグリバエ類にも2,000倍で適用あり。
	オンシツコナジラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 カルホス微粒剤Fを使用している時は使用不可
	コナジラミ類	チェス顆粒水和剤	散布	5,000倍	4回 以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
		ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 ベストガード粒剤は同一成分を含み、総使用回数は4回以内とする。アブラムシ類にも適用あり。
	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期
		フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回 以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		テデオン乳剤	散布	500倍	10回 以内	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回 以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤、発生初期に使用。うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。

ハウスの出入口や側面に300番:1mm目以下の防虫ネットを張る。

※ 薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※ 耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。)

◇ 耕種的・物理的防除：立枯病：高温・多湿は発生を助長するので、施設で換気をはかり、加湿にならないようにする。排水を良くする。

チョウ目害虫・アブラムシ類・コナジラミ類・アザミウマ類：施設栽培では、ハウスの出入口や側面に300番：1mm目以下の白の防虫ネットを張る。

◇ 発生予察に基づく防除 : ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

デルフィニウム病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植前	立枯病 白絹病	ガスタード微粒剤(劇)	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いので商品のラベルを確認する。
	立枯病	リゾレックス粉剤	土壌混和	50kg/10a	1回	リゾレックス粉剤、リゾレックス水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
生育期	立枯病	リゾレックス水和剤	土壌灌注 3ℓ/㎡	500倍	5回 以内	リゾレックス水和剤は株腐病、茎腐病、白絹病(株元灌注)にも適用あり。
	白絹病	モンカットフロアブル40	株元散布	1,000倍	3回 以内	
	うどんこ病	アンビルフロアブル	散布	1,000倍	2回 以内	発病初期 EBI剤は耐性リスクが高いため、総使用回数は2回以内とする。
		サンヨール	散布	500倍	8回 以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
		ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回 以内	予防・治療剤 発病初期 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	灰色かび病	フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回 以内	予防剤 発病初期
		ゲッター水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	予防・治療剤
		ボトキラー水和剤	ダクト内投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤 発病前～発病初期
	コナジラミ類	ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
	コナジラミ類 アブラムシ類	チェス顆粒水和剤	散布	5,000倍	4回 以内	発生初期
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		ロディー乳剤(劇)	散布	1,000倍	2回 以内	合成ピレスロイド剤なので、抵抗性を考慮し連用を避けると共に、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。 ハダニ類にも適用あり。
	ヨトウムシ類	オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 アオムシ、アザミウマ類、アブラムシ類にも適用あり。
		アフーム乳剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 オオタバコガ、ハモグリバエ類は1,000倍、アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
	オオタバコガ ハスモンヨトウ	フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回 以内	発生初期
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		テデオン乳剤	散布	500倍	10回 以内	発生初期 1葉当たり1～2匹時に使用。卵・幼虫に効果がある。
		カネマイトフロアブル	散布	1,000倍	1回	シクラメンホコリダニにも適用あり。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	散布	1,000倍	2回 以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤、発生初期に使用。うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
発生時	カタツムリ類 ナメクジ類	スラゴ	株元配置	1～5g/㎡	—	ナメクジ類及びカタツムリ類の発生あるいは被害の受けた株元に配置する。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。)

◇耕種的・物理的防除：立枯病：発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。

灰色かび病：多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

◇発生予察に基づく防除：ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ストック病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
は種又は植付前	立枯病 萎凋病 苗腐病	ガスタード微粒剤(劇)	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため、商品のラベルを要確認。
定植時	コナガ	オンコル粒剤5	株元散布	0.5g/株	1回	
生育期	菌核病	トップジンM水和剤	散布	1,500倍	5回 以内	予防・治療剤
	灰色かび病	アフエットフロアブル	散布	2,000倍	2回 以内	予防剤 発病初期。 浸透性殺菌剤、耐性菌防止のため使用回数は2回まで。
		フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回 以内	予防剤 発病初期
		ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回 以内	予防・治療剤 発病初期 うどんこ病、黒斑病にも適用あり。
		ボトキラー水和剤	ダクト内投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤 発病前～発病初期
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には1,000倍(灌注1ℓ/㎡)で適用あり。
		スカウトフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回 以内	合成ピレスロイド剤は抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
	コナガ	トアロー水和剤CT	散布	1,000倍	—	発生初期
	コナガ ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期 高温時の散布は避ける。アオムシにも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 アブラムシ類、アザミウマ類、アオムシ、ハイマダラノメイガにも適用あり。
		コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期 アオムシ、ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類に適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		アフーム乳剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 オオタバコガ、ハモグリバエ類にも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
	ハスモンヨトウ	フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回 以内	発生初期 オオタバコガにも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
開花促進	葉数10～14枚時とその7～10日後	ビビフルフロアブル	茎葉散布	1,000倍 100ℓ/10a	2回	花芽分化した株には使用しない。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

◇耕種的・物理的防除: 灰色かび病は、多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

コナガ・ヨトウムシ類・アオムシ: ハウスの出入口や側面に300番: 1mm目以下の防虫ネットを張る。

◇発生予察に基づく防除: ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

キク病害虫防除基準①

JA山形おきたま花卉振興会

使用 時期	適用病害虫	農薬名	使用 方法	使用量 希釈倍数	使用 回数	注意事項
挿し芽時	白さび病	バンタック水和剤75	散布	500倍	2回 以内	発病初期 親株に散布後、すぐに挿し穂を採り、挿し芽を行う。アフエットフロアブルと同一成分と見なし、同一圃場における総使用回数は2回以内とする。
植付前	センチュウ類 (ハガレセンチュウを除く)	ガスタード微粒剤(劇)	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため商品のラベルを確認する。
定植時	アザミウマ類 マメハモグリバエ	ダントツ粒剤	生育期 株元散布	2g/株	4回 以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
生育期	白さび病 ※6月上中旬に 防除を徹底する	コロナフロアブル	散布	800倍	－	石灰硫黄合剤、ボルドー液等アルカリ性薬剤との混用はさける。28℃以上の気温では使用しない。
		アンビルフロアブル	散布	1,000倍	2回 以内	予防・治療剤 発病初期 うどんこ病にも適用あり。EBI剤は耐性菌出現防止のため、同系統のトリフミン乳剤、トリフミンジェットは連用しない。また、併せて2回以内とする。
		ジマンダイセンフロアブル	散布	500倍	8回 以内	予防剤 石灰硫黄合剤、ボルドー液等アルカリ性薬剤及びチオジカルブ剤との混用は避ける。高温時の使用を避ける。
		アフエットフロアブル	散布	2,000倍	2回 以内	発病初期 うどんこ病、灰色かび病にも適用あり。バンタック水和剤75と同一成分と見なし、同一圃場における総使用回数は2回以内とする。
		トリフミン乳剤	散布	1,000倍	2回 以内	予防剤 EBI剤は耐性菌出現防止のため、同系統のアンビルフロアブル、トリフミンジェットは連用しない。また、併せて2回以内とする。
		ピリカット乳剤	散布	1,000倍	6回 以内	予防剤 発病初期 アブラムシ類にも適用あり。2,000倍でうどんこ病にも適用あり。
		ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回 以内	予防剤 発病初期 うどんこ病、黒斑病、灰色かび病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	さび病	エムダイファー水和剤	散布	400倍	8回 以内	発病初期 予防剤 灰色かび病、炭疽病、べと病にも適用あり。ボルドー液、石灰硫黄合剤など、アルカリ性の強い薬剤との混用はしない。銅剤との混用は避け、銅剤との散布期間は、7日以上あける。
	褐斑病	トップジンM水和剤	散布	1,500倍	5回 以内	予防剤
		ダコニール1000	散布	1,000倍	6回 以内	予防剤 うどんこ病、白さび病、斑点病、黒斑病にも適用あり。
		サンヨール	散布	500倍	8回 以内	予防剤 発生初期 うどんこ病、灰色かび病、白さび病、黒斑病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回 以内	発生初期 IBR剤新しいタイプの殺虫剤。コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 カメムシ類、コナジラミ類に適用あり、ハモグリバエ類に(灌注1ℓ/㎡)で適用あり。
		オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回 以内	発生初期 アザミウマ類、アオムシ、ヨトウムシ類、マメハモグリバエ、オオタバコガにも適用あり。
		ウララ50DF	散布	5,000倍	6回 以内	発生初期
		ハチハチ乳剤(劇)	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 アザミウマ類、ハモグリバエ類、白さび病にも適用あり。
	アザミウマ類	カウンター乳剤	散布	2,000倍	5回 以内	発生初期 オオタバコガにも適用あり。
	ミカンキイロアザミウマ	アーデント水和剤	散布	1,000倍	2回 以内	発生初期 合成ピレスロイド剤であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
		ベストガード水溶剤	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
	オンシツコナジラミ若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期 マメハモグリバエにも適用あり。
	マメハモグリバエ	トリガード液剤	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期
	ハモグリバエ類	アクタラ顆粒水溶剤	散布	2,000倍	6回 以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマに1,000倍で適用有り。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

キク病害虫防除基準②

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
生育期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期に使用。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回 以内	発生初期に使用。ミカンキイロアザミウマ、オオタバコガ、ハダニ類、アワダチソウグンバイにも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期に使用。シロイチモジヨトウにも適用あり。
		プレオフロアブル	散布	1,000倍	4回 以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回 以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウにも適用あり。
		ディアナSC	散布	2,500倍	2回 以内	発生初期に使用。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生するので注意する。アザミウマ類、ハモグリバエ類にも適用あり。
		アニキ乳剤	散布	1,000倍	6回 以内	発生初期 ハスモンヨトウ、マメハモグリバエにも適用あり。 アグリメックと同系統のため連用を避ける。
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	1,000倍	1回	発生初期に使用。アブラムシ類にも適用あり。 卵・幼虫・成虫に効果がある。
		カネマイトフロアブル	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		バロックフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		スターマイトフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	散布	500倍	5回 以内	発生初期に使用。アニキ乳剤と同系統のため連用を避ける。アザミウマ類にも適用有り。
		エコピタ液剤	散布	100倍	—	気門封鎖剤、発生初期に使用。うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
さし木の 発根促進及び 発生根数の増加	—	オキシベロン液剤	10秒挿し穂 基部浸漬	2倍	1回	
開花抑制	摘芯時または定植後1週間 以内及びその後10～14日毎	エスレル10	全面散布	500～1000倍	3回 以内	株全体がぬれる程度散布する。
開花促進、 草丈伸長促進	生育期	ジベレリン	茎葉散布	25～100ppm	2回 以内	
節間の 伸長抑制	生育期	ビーナイン顆粒水溶剤	茎葉散布	500倍～ 5,000倍	4回 以内	施設栽培に限る。

- ※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型、価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。
- ※ 耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。
- ※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。
- ※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。（ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。）
- ◇ 耕種的・物理的防除 ；白さび病、黒さび病：無病の冬至芽を植え付ける。罹病葉は早期に摘み取り適切に処分する。
えそ病：発病株からさし穂を取らない。
黒斑病・褐斑病：密植を避ける。窒素質肥料の過用を避ける。
- ◇ 発生予察に基づく防除 ；ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量（飛来・侵入・増殖の状況）を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色に誘引される。
- 【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

りんどう病害虫防除基準

JA山形おきたまりんどう振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	定植時 本剤を使用した後はカルホス乳剤は使用不可。
生育期	葉枯病	Zボルドー	散布	500倍	—	予防剤 発蕾期以降の使用は避ける。
		オーソサイド水和剤80	散布	600倍	8回以内	予防剤 立枯病、苗立枯病、茎腐病にも適用あり。
		ピリカット乳剤	散布	1,000倍	6回以内	予防剤 発病初期 アブラムシ類にも適用あり。 うどんこ病には2,000倍で適用あり。
	葉枯病 褐斑病	ダコニール1000	散布	1,000倍	6回以内	予防剤
	黒斑病 葉枯病	ポリオキシシンAL水溶剤	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期 うどんこ病、灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。ポリベリン水和剤は同一成分を含んでいるため、使用回数は合わせて8回以内とする。
	灰色かび病	ポリベリン水和剤	散布	1,000倍	8回以内	予防剤・治療剤 発病初期 ポリオキシシンAL水溶剤「科研」とベフラン液剤25(劇)は同一成分を含んでいるため、使用回数は合わせて8回以内とする。
	褐斑病 黒斑病	ストロビーフロアブル	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期
		アフェットフロアブル	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病、うどんこ病、花腐菌核病にも適用あり。
		フルピカフロアブル	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病にも適用あり。
	花腐菌核病	トップジンM水和剤	散布	1,500倍	5回以内	予防剤
		インダーフロアブル	散布	5,000倍	2回以内	予防剤 発病初期 葉枯病にも適用あり。 EBI剤は耐性菌出現防止のため、2回以内とする。
		ベフラン液剤25(劇)	散布	1,500倍	8回以内	予防剤 黒斑病、葉枯病にも適用あり。ポリベリンは同一成分を含んでいるため、使用回数は合わせて8回以内とする。
		パレード20フロアブル	散布	2,000倍	2回以内	発病初期 黒斑病、うどんこ病(4,000倍)にも適用あり。耐性菌出現防止のため2回以内とする。
	リンドウホソハマキ	ノーモルト乳剤	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 ヨトウムシ類には花き類2000倍で適用あり。
		アディオンフロアブル	散布	1,500倍	2回以内	合成ピレスロイド剤抵抗性害虫出現防止のため総使用回数は2回以内とする。ヒラズハナアザミウマにも適用あり。
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。
	アブラムシ類 アザミウマ類	オルトラン水和剤	散布	1,000倍	5回以内	発生初期 ヨトウムシ類、アオムシにも適用あり。
	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	散布	2,000倍	5回以内	発生初期
		ハチハチフロアブル(劇)	散布	1,000倍	4回以内	発生初期
		ディアナSC	散布	2,500倍	2回以内	発生初期に使用。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生するので注意する。リンドウホソハマキ、ハモグリバエ類、コナジラミ類、オオタバコガにも適用あり。
	ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル(劇)	散布	2,000倍	2回以内	発生初期に使用。ハダニ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	散布	1,000倍	6回以内	発生初期
		フェニックス顆粒水和剤	散布	2,000倍	4回以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウ、リンドウホソハマキにも適用あり。
	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。
		スターマイトフロアブル	散布	2,000倍	1回	発生初期に使用。
		アグリメック(劇)	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。 アザミウマ類にも適用あり。

- ※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型、価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。
- ※ 耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同一薬剤の連用、多数回使用は避けて下さい。
- ※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。
- ◇ 耕種的・物理的防除 **ウイルス病：発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。**
株の仕立て時や収穫時はハサミを使わず手で折り取る。
- ◇ 発生予察に基づく防除 ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時以降は必要に応じて防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄に誘引される。

【令和3年12月22日現在の登録内容に基づいて記載しています。】